

一メッセージ 2017年1月

# 放蕩父の帰宅



私の愛読しているC・H・カウマン夫人の著書に「放蕩息子のたとえ話」の再訳が紹介されています。これは父の日のテーマを考えるのに相応しいものです。

「ある人にふたりの息子がいました。弟息子の方が父親に言いました。『お父さん、私が受くべきあなたの時間、配慮、友情、助言、指導を私に分けて下さい。』そこで、父親は息子に小切手を渡し、彼を有名な予備校とダンス学校と大学へ送り出しました。そして、彼は、息子に十分なことをしてやっているという自己満足に浸ろうとしました。

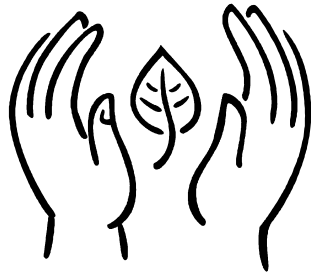
間もなく、父親は、自分の関心、願望、野心を取りまとめて遠い国へ旅立ちました。その国は、株券、有価証券の国で、息子はこのようなものに関心がありませんでした。父親は息子と親しく過ごさなければならない貴重で大切な機会を失ってしまいました。彼は人生の最良の日々をこうやって過ごし、金は儲けましたが、心の満足はありませんでした。そして、彼の心には大きな飢餓が迫ってきました。彼は、他人の同情と真の友情とに窮しはじめました。……。

しかし、彼は本心に立ち返って言いました。『私の知人たちは、息子や娘たちを持って、その子どもらと仲良くお互いに語り合ったり、理解し合って、本当に幸せそうに過ごしている。それに比べると、私は、ここで心の飢え渴きで、死のうとしています。私は立って息子のところへ帰って、こう言おう、『息子よ、私は天に対しても、お前に対しても罪を犯した。もはや、私はお前に父親と呼ばれる資格はない。私をお前の知人の一人にしておくれ。』そこで、立って息子のところへ出かけました。

まだ遠く 離れていたのに、息子は父親と認め、驚いて気が動転してしまい、走り寄って、父の首を抱く代わりに、彼は後退して不安におののいていました。父は息子に言いました『息子よ、私は天に対しても、お前に対しても罪を犯してしまった。私はこれまで一度だってお前にとって本当の父親ではなかった。私はもはや父親と呼ばれる資格はない。私を今、許してくれ。そ

して今度こそさあ仲良くしよう。』

しかし、息子は言いました。『駄目です。もう遅すぎます。私があなたの友情、助言、相談を必要としたときに、あなたはそれを下さらず、またあなたは忙しすぎました。確かに私は必要な知識と友情を他から得ました。しかし、それらは、みな間違っただけでした。そして、ああ、今や私の魂もからだも駄目な人間になってしまいました。もう遅すぎます・・・遅すぎます・・・遅すぎます！』



**旧約聖書**に出てくる祭司エリは、父親の務めをおろそかにしてし

てまいりました。そのため息子たちは祭司の務めを果たさず、手の付けられない者になり、やがては滅ぼされてしまいました。

父親になることはやさしいことです。しかし、父親であることは難しいことです。父親となった者は、大切な子どもの魂を失わないためにも、神様を見上げ、その言葉に心を留める者でありたいと思います。

「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」（申命記6章6節7節）

（牧師 小林則義）